

巻頭言

琵琶湖に見守られて

環境総合研究センター長 中野 桂

滋賀大学環境総合研究センターは2003年4月に設立されてから今年で10年が経ちました。10年はセンターとしては大きなひと区切りではありますが、本学における環境研究の歴史は、さらに半世紀ほど遡ります。

琵琶湖・瀬田川のほとりに立地する本学は、1952年に当時の学芸学部（膳所校舎）に湖沼研究室を設置して以来、ながきにわたって環境分野における教育・研究、そしてそれらを通じた地域貢献活動を行なって参りました。

この間、石山キャンパス（教育学部）では、湖沼研究室を基盤として、1976年には湖沼実習施設として省令化し、さらに1995年にはそれに教育研究農場・研究林を加えて、環境教育湖沼実習センターが設立されました。

一方、彦根キャンパス（経済学部）でも、1990 - 92年に当時の尾上久雄学長を研究代表とした琵琶湖保全事業の経済評価研究プロジェクトに取り組んだり、1994年には教員有志により「滋賀大学経済学部環境フォーラム」が結成され、本格的な共同研究が始まりました。

そして1997年、両キャンパスの環境分野における教育・研究の蓄積を背景に、環境に関する具体的な課題の解決に向けた教育・研究をさらに推進し、またそれを通じて地域社会に貢献することを目的として、学部横断的かつ学際的な自主的教員組織として「滋賀大学環境フォーラム」が結成されました。

その後教育面では、2000年には教育学部に環境教育課程が、2001年には大学院教育学研究科学校教育専攻には環境教育専修が設置されました。

こうした機運と呼応して、2001年に公害研究などに多大な実績のある宮本憲一・大阪市立大学名誉教授を学長にお迎えし、環境に関する研究および教育をさらに全学的取組として前進していくことになりました。

結果として、2003年に、これまでの実績をさらに発展させ、社会的要請に応えるとともに、琵琶湖を有し「環境先進県」と評される滋賀県に立地する大学として、「環境の世紀」に相応しい発展をするための新たな枠組みとして本センターが設立されました（初代センター長山崎古都子

教授）。

翌2004年には教育学部附属環境教育湖沼実習センターを統合し、2007年には、滋賀県琵琶湖研究所の所長であった中村正久教授がセンター長に就任しました。その後、2010年には梅澤直樹・経済学部教授が、そして2012年には筆者がその任を引き継ぐこととなり、現在に至ります。

現在、本センターは、4名の専任教員から構成されており、さらに約30名の学部教員がセンター研究員という形で参加をしています。「総合」という名の通り、研究テーマは幅広く、環境教育、環境経済、環境政策、地域・生活環境、湖沼・流域に関する研究などを行っています。また、「総合」という言葉の意味は単に幅広いだけでなく、様々な専門領域を持つ研究者が互いに交流することによって、より深みのある研究をしていこうという意味も含まれています。

当然のことながら、時々のセンター長の方針や得意とする研究分野によって、センターの方向性は若干異なってきましたが、琵琶湖の畔にある大学としての半世紀以上にわたる研究の歴史は、「滋賀大学における環境研究」というひとつのスタイルを作り出しつつあるように思います。

多数の大学院生を抱える大規模な大学とは違い、マンパワーを背景にした研究はなかなかできませんが、それぞれが国内外の研究機関などと連携して、多彩でユニークな研究に取り組んでいます。科研費やその他の外部資金も例年多く獲得しています。

現在いる専任教員の平均年齢は若く、これからの10年は彼らにとってますます研究に脂がのってくる時期です。是非ともセンターの今後にご期待ください。

末筆になりましたが、センターが無事に10年を迎えられましたのも、設立にご尽力いただいた方々はもとより、日頃よりご協力を頂いている研究機関、行政機関、そしてなによりも研究者の皆様のお陰です。ここに改めて御礼を申し上げたいと思います。また、今後とも、より一層のご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。以上を持ちまして、巻頭のご挨拶とさせていただきます。